

Distr. N. China, S. Manchuria, Korea  
and N. Kyushu.

キヌゲカメバソウ, チョウセンカメバソウ

Ket to the varieties of *T. radicans*

A. Stems and petioles sparsely clothed with

spreading pilose hairs. .... var. *radicans*

A. Stems and petioles subdensely clothed with  
adpressed short pubescent hairs ..... var.  
*sericea*

(東京大学理学部附属植物園)

## キンモクセイ, ギンモクセイ, ウスギモクセイについて (山崎 敬)

Takasi YAMAZAKI: Wild and Cultivated Plants of *Osmanthus fragrans* Lour. in Japan.

キンモクセイとギンモクセイとは普通に栽培されていて身近なものであるが、その性質は充分に知られているとはいえない。本によって異なった記述が見られる。主な本での記述を述べてみよう。牧野図鑑の初版(1940)ではギンモクセイ、キンモクセイとも「本邦ニ在ル品ハ皆雄本ナレバ子房縮小シ、敢テ結実スルコトナシ」とある。この記述は初版から改訂版(1989)まで変っていない。北村・村田の保育社の原色日本植物図鑑、木本編(1971)でも同じようにギンモクセイ、キンモクセイとも「日本に入っているものは雄株のみである」とされている。大井氏の日本植物誌(1975)では結実のことには触れていない。平凡社の寺崎: 日本植物図譜の改定版(1977)では、ギンモクセイは「わが国には雄株が多く、子房は萎縮して結実はまれ」とあり、キンモクセイは「結実しない」とある。平凡社の佐竹等監修の日本の野生植物、木本編(1989)ではギンモクセイの結実には触れていず、キンモクセイは「ふつつ結実しない」とややあいまいな表現であるが、果実を持つ写真が載せられている。このように著書によって記述がすこしずつ異なるが、一般にギンモクセイは結実しないものとされている。ところがギンモクセイにはしばしば結実する木があるので、珍しい現象だとして植物園に持ちこまれることがある。なにが正しいのかを明らかにしたい。

結論を先に述べると、ギンモクセイには雄株と雌株とがあって、雌株はよく結実する。キンモクセイは雄木だけなので結実することはない。結実するものがあつたら非常に珍しいことである。上述の著書では寺崎図鑑の記述がやや正しいが、ギンモクセイの子房は萎縮して結実は稀であるとい

うのは当然ない。牧野先生の説に影響されているようである。このように異なる記述がみられるのは、日本のモクセイ類が研究者の間にも充分理解されていないことに原因がある。日本には野生種とそれから作られたと考えられる園芸品があり、また中国から移入したと見られる園芸品もある。これらが混同されているので混乱しているのである。以下に此等に対する考えを述べてみたい。ただ中国の園芸品がよく解っていないので、それとの関係は今後の問題である。

まず問題となるのはウスギモクセイが日本の野生かどうかということである。牧野図鑑の改定版にはウスギモクセイの図が新たに加えられたが、この解説では中国原産と書かれている。この本は執筆者が不明のため、初版のような責任ある記述としての学術的な価値は乏しいが、現在でも日本に野生するとは考えない見解があることがわかる。しかし永年にわたって九州の植物を研究されている初島住彦氏が野生すると認めているのだし(本誌36: 347, 1961), なにより明らかな事実は、九州のものが大陸のものと異なる形をしているので、日本の野生と考えてよいであろう。九州のものは葉が大きく幅が狭い傾向がある。大陸のものは葉がより小さく幅が広い、個体変異もあることだから、両者に同じ形のものでてくるが、統計的に処理すれば明らかに差異の出る違いである。ウスギモクセイは質がやや薄い点も、葉の厚い傾向のある中国ものと区別される。変種として中国のものから区別してよいものと思う。

当時はまだ日本に野生することは知られていなかったが、ウスギモクセイの形のものが栽培品のなかに存在することに、最初に気がつかったのは

牧野先生で、栽培品をもとにして var. *thunbergii* Makino ウスギモクセイと名付けられ (1927), その後南九州に野生することがわかった日本固有の変種である。中国の金桂や丹桂をこれに当てるのは誤りである。ウスギモクセイは葉が細長い点ではヒマラヤの var. *longifolius* (DC.) Hara によく似ている。しかしこれは葉柄が長く、葉の先は急に狭まって尖るのでウスギモクセイとは異なる。ウスギモクセイは時に栽培されるが、これには結実するものがある。平凡社の樹木図鑑の果期写真はウスギモクセイでないかと思う。花の時期に確かめる必要がある。キンモクセイは葉の形から見ると大陸のものよりは、日本のウスギモクセイに良く似ている。初島氏はキンモクセイとウスギモクセイとは花色のほかに区別はないと言っておられる。一般に中国からの渡来とされているけれど、日本に野生するウスギモクセイの中から花色の濃いものを選別したのであって、中国のものではないであろう。それがたまたま雄木であって、挿し木による増殖で広がり、現在のものはすべて雄木なのだと思う。

キンモクセイを中国名の丹桂に当てることが多いが、最近日本に入ってきている中国の丹桂は花に紅色が入るというがまだ日本では開花していない。しかし葉はキンモクセイとは明らかに異なる。また本草花蒔絵 (1739) に丹桂の図と解説があり、それには花は柿紅色とあって、図の葉の形は中国産のものに一致する。キンモクセイと丹桂は別のものである。中国にも日本と同じ花色のキンモクセイ類似のものが存在する。中国で金桂と呼ばれるものであろう。この雌株が園芸家の手によって最近日本にも入ってきた。しかし花着が貧弱で見栄えがしないので廃棄されて現在は見られない。残された写真では充分でないが、葉の形は日本のものと異なるようである。中国の金桂と、日本のキンモクセイとは、別個にそれぞれの野生種から選抜されたものと思う。

ギンモクセイも最近よく見掛けるようになった。特に本には結実しないとあるのに実がなるというので注目され、結実する木が東京でもかなりの個所で知られる。これには二つの系統がある。ひとつは葉が短くて幅が広い。牧野先生はこれに var.

*latifolius* Makino の名を付けて区別したが、キンモクセイと比較上の区別にすぎず、中国の桂花 var. *fragens* と同じものである。一般にシキザキモクセイと呼ばれるものがこれに当る。もうひとつは葉が大きくて幅が狭く、花は白色であるが日本のウスギモクセイに似たものである。後者は日本に野生するウスギモクセイから白花のものを選抜したのでないかと推定される。ウスギモクセイの野生品の中に白花のものがあることは初島氏も述べておられる。これは中国の桂花または銀桂とは異なる。牧野先生は東京での栽培品は淡黄色であると述べておられウスギモクセイの名が付けられたのだが、現在東京で見られるのは純白の花である。白花と淡黄色では分類学的に特に区別する必要はないと思うけれど、園芸的には問題になるので、シロモクセイ白木犀 (新称) と呼んでおく。これは雌木なのでよく結実する。岩崎灌園の本草図譜のギンモクセイはこれに当るようであり、キンモクセイとはほぼ同時期に園芸品として現れたものであろう。

中井先生の樹木誌にあるキンモクセイの果実の図や、平凡社のキンモクセイの結実した枝の写真は、この日本系のシロモクセイかウスギモクセイに当ると思う。葉はギンモクセイよりキンモクセイに似るので、キンモクセイの果実としてしまったのであろうが、花は白色か淡黄色のはずである。平凡社の同じ頁にあるギンモクセイや、牧野図鑑のギンモクセイは中国系の桂花である。山と溪谷社の野生樹木図鑑 (1980) にはキンモクセイ、ギンモクセイ、ウスギモクセイの3者が同じ頁に並べて載せられているので、比較するのに便利で、それぞれの様子がよくわかる。ただキンモクセイとウスギモクセイとは花色の濃淡の程度の差だから、明確な区別はむずかしい。この中ギンモクセイは中国産の桂花であるが、他は日本産のものと思われるから、同書の記載にあるように丹桂や銀桂に当てるわけにはいかない。

本草花蒔絵には木犀の図がある。解説には白花と黄花があると記している。葉型は同書の載せられている丹桂と同じで、この白花のものが現在の中国系のギンモクセイに当たるのであろう。中国の桂花は白色から淡黄色まであり、淡黄色のもの

は時に区別して金桂と呼ぶらしい。この両者が日本に入っていた可能性が高い。元禄の頃日本で栽培されていたのは、中国系の桂花や丹桂であったと思われる。キンモクセイの名が出てくるのは本草図譜あたりが初めて（宮沢文吾，花木園芸，1940），それ以前のものは中国産の丹桂である。宮沢氏はキンモクセイの記録がそれ以前に見られないのは不思議であると書かれておられるが，江戸中期以後に作られたものであれば不思議ではない。本草図譜の図の完成したのが文政13年（1830）というから，本草花蒔絵が出された元文4年（1739）から，ほぼ100年の間にキンモクセイ，ウスギモクセイ，シロモクセイなどの日本産の園芸品が加えられたものと思われる。本草図譜にはわざわざキンモクセイは結実しないと書かれている。

日本のものを中国のものから変種として区別すれば，学名としては園芸品のキンモクセイに付けられた var. *aurantiacus* Makino (1902) が使われることになる。下記に学名を整理しておく。Anonymous, Useful Pl. Japan (1895) に *O. fragrans* var. *alba*, var. *lutea*. の名があるらしい。この後者はキンモクセイである可能性が高いが，この本がどこにあるかわからない。日本の本では引用されているのを見たことがない。P. S. Green が *O. fragrans* の異名に挙げている。著者不明の本というから，正規の学名かどうか疑問であるが，検討する必要はある。この本には多数の日本の有用植物の図があるらしいのでなんとか探したいものである。

ここにギンモクセイ，キンモクセイなどを問題にしたのは，水島うらら氏が昭和61年（1986）に東京，府中市の自宅の近所を散歩中，結実するモクセイ類を見付け，それが白花のものであることがわかったことに始まる。調べたところそれはウスギモクセイでもギンモクセイでもなく，シロモクセイであった。資料を提供された同氏に深謝します。

*Osmanthus fragrans* Lour., Fl. Cochinch.: 29 (1790).

var. *fragrans* ギンモクセイ，シキザキモクセイ

*Osmanthus fragrans* Lour. var. *latifolius*

Makino in Bot. Mag. Tokyo 6 : 32 (1902).

*Osmanthus asiaticus* Nakai, Tr. et Shr. Jap. ed. 1 : 264, t. 144 (1922).

Distr. C. to S. China and Vietnam, cultivated in Japan.

var. *aurantiacus* Makino in Bot. Mag. Tokyo 16 : 32 (1902).

f. *aurantiacus* キンモクセイ

*Osmanthus aurantiacus* (Makino) Nakai, Tr. et Shr. Jap. ed. 1 : 265, t. 145, excl. f. c, (1922).

*Osmanthus fragrans* Lour. f. *aurantiacus* (Makino) P. S. Green in Not. Bot. Gard. Edinb. 22 : 495 (1958).

Cultivated in Japan. Male trees.

f. *thunbergii* (Makino) Yamazaki, stat. nov. ウスギモクセイ

*Olea fragrans* Thunb. in Nov. Act. Reg. Soc. Upsal. 4 : 34, 39 (1783).

*Osmanthus fragrans* (Thunb.) Sieb., Syn. Pl. Oecon. Jap. : 36 (1830), non Loureiro 1790.

*Osmanthus fragrans* Lour. var. *thunbergii* Makino in J. Jap. Bot. 4 : 4 and frontispiece (1927).

*Osmanthus aurantiacus* (Makino) Nakai var. *thunbergii* (Makino) Honda, Nom. Pl. Jap., ed. 1 : 511 (1939).

*Osmanthus intermedius* Nakai in Bull. Nat. Sci. Mus. 27 : 34 (1949).

*Osmanthus aurantiacus* (Makino) Nakai var. *cremeus* Nakai, l. c. 27 : 34 (1949).

*Osmanthus fragrans* auct non Lour. : Hatusima in J. Jap. Bot. 36 : 350 (1961).

Distr. S. Kyushu. Wild.

f. *leucanthus* Yamazaki, f. nov. シロモクセイ

Corolla alba.

Cultivated in Japan.

Hab. Tokyo, Fuchu, cult., flowers white, female tree (U. Mizushima, Oct. 14, 1987, Type TI).

(東京大学理学部附属植物園)